



建設の幻獣5 大いなる建設者たち

ダイダラボッチ

太古、日本列島にはダイダラボッチという巨人が住んでおり、山や湖を造ったという伝説が各地に残っています。富士山も彼の作品らしいので、おそろしいまでの大男だったようです。

「富士山を造るために、土を取った跡



ダイダラボッチ(当館職員 上原由子画)

で、今でも成長し

ない」

しかし、意外なことに東京の世田谷区にあった小さな橋を架けたという話もあります。代田橋の駅名などがその名残ですが、富士山に比べてずいぶん小さな細工に思えますね。手先も器用だったのでしょうか。

『新修世田谷区

史 上巻』は、江戸前期の仮名草子『紫の一本』にその伝説があることを示し、これによって少なくとも17世紀にはこの話が存在していたことがわかります。

「大多橋は、四谷新町の先、笹塚の手前にて大多ボッチが掛けたる橋也、大多とは大人にて百合若大臣といった。大力ありて強弓を引き、よく礫をうつ、世田谷の代田には、ダイダラボッチの足跡という大きな窪地があった」

ここでいう「百合若大臣」とは、幸若や説教節で語られた超人的英雄のことであり、蒙古軍を打ち破ったなどと語られていました。

乙媛

さて、ダイダラボッチは、むくつけき大男といったところですが、女性も負けてはいません。例えば、鹿児島県志布志市の枇榔神社に祀られる乙媛です。由緒によると、乙媛は天智天皇と里嬢娃の間に産まれたのですが、自分の子ではない

た。その故に姫君は勅命に依って沖合に放たれ給うた。

姫君の乗られた小舟は月明の金波銀波を分けて有明湾の真中に進んだ。たれ一人なきを幸姫は大急ぎで湾の中にこの枇榔島を造られた。そして次の夜には陸に渡るべき岩道を海中に築かれ始めた。所が『天邪鬼』が之を知って鶏に云ひ付けて『コケコー』を少し早めに鳴かしためで乙媛の計画は成し遂げられなかったと云ふ」

アマノジャク

こうして乙媛は、アマノジャク(天邪鬼)に邪魔をされてしまいました。ひと昔前は、ひねくれ者を指して「あいつはアマノジャクだからなあ」などということもありました。文字通り、その代名詞だったアマノジャクについて、柳田国男は次のように述べています。

「アマンジャクが神の計画の妨害者であり、しかも通例は『負ける敵』であったことは、弘く他の民間伝承にも認められて居る。是が果して神代史の天の探女の元の姿であるか、或は又今に承継いだのは其名前ばかりであつたか」

ここにいう、天探女とは、『日本書紀』や『古事記』に語られる神であり、葦原中国を平定するために派遣された天菩比神に、讒言をして死に追いつたことから、天邪鬼の原像だという説もあります。

ところで、アマノジャクは、ニワトリにいつけたり、自分が鳴きまねをしたりし

て、夜が明けたように見せかけ、神などがなさる工事を中断させます。これは彼の得意ないたずらなのですが、実はこうしたことから、古代の人々が神とはどのような存在だと考えていたのか、その一端が垣間見えるのです。

例えば、奈良県桜井市の箸墓古墳の造成伝説では、「昼は人が造り、夜は神が造つた」とあり、あるいは「言主という神が、役行者に命じられて葛城山と吉野の金峯山の間に橋を架けた際に、「醜さを恥じて夜だけしか働かなかつた」などと語られるように、神などが持つ超常的な力は、太陽の下では発揮できなかったのです。だから、夜が明けたことを知らせれば、工事を中断せざるを得なかったのでしょうか。

この他にも、皇祖神を祀り奉る伊勢神宮において、式年遷宮の重要な儀式である「遷御」でもこのことを確認することができま。申すまでもなく、式年遷宮は20年に一度、社殿を新たに造り替える神事であり、遷御はご神体を旧殿から新殿へと移し替える最も重要な儀式にあたります。

遷御は夜間に行われるだけでなく、照明はすべて消され、神体は厳重に覆い隠されます。このことからわかるように、神は光に当ててはならぬもの、人目につけてはならぬもの、と考えられていたのです。

それはさておき、アマノジャクのいたずらはニワトリの鳴きまねだけにとどまりません。例えば『旅と伝説』昭和8

年(1933)10月号の「因幡南部の伝説 西郷村にて採集」には、九十九谷の由来譚が紹介されており、こでもアマノジャクが登場します。

「小河内と北村谷との間に表圓山と云ふ山がある。此の山は大小無数の岡や谷が起伏して、美事な山で千谷もある変化に富んだものであった。そこで弘法大師が諸国巡錫の途中、此の山を探索して、其の変化あるに感じ高野本山の如く靈験あらたかな霊場にしよう、千体の仏を高野山で受けこれを設置せんとし再び、千谷をたしかめられたのであった。所がアマンジャクがこの山に住んで居て、一岡一谷をかくしてしまつたために、九百九十九谷となり、霊場として千体を設けることが出来なくなり大師は残念そうにそこを立去られた。其時、千体の仏を涙をのんで河に流されたのが今の千代川だと云ふ。その盗んだ一岡一谷をアマンジャクが棒で荷うて湖山池を埋めようとして持つて出たが、途中でもつこの緒が切れて、其所に置いたのが大呂山で一方の緒の切れた方は形がくづれてしまつた。そのくづれた方はくも山であると云ふ」

ここで語られるアマノジャクは、「一岡一谷」をまるごとかくしてしまふような、大きな力を持っています。この話の後でも語られていますが、実はアマノジャクは、工事妨害だけでなく、ダイダラボッチと同じように山を造成するなどといった、とてつもない建設活動も行います。神奈川県に伝わる伝説を谷川磐雄『民



と天皇が疑いを持たれたため、乙媛は悲しみのあまり海中に身を投ぜられたとあります。

このように悲劇的な最期を遂げたとされる人物については、それとはまったく逆の伝説が伝わっている場合もあります。『旅と伝説』昭和6年(1931)3月号からご紹介しましょう。

「志布志から一里ばかりの沖合に周圀約二里の枇榔島がある。此の島に祀られている枇榔島神社は、天智天皇の皇女乙媛様と申上げる姫君をお祀りしてあつて和銅年間の創建だと云ふ。

姫君は非常に男性的な活発なお方で、故あつてこの志布志に御滞在遊ばした際、思ひ切った御悪戯をなされた。荒野を美田に化したり、小山を湾に陥没させたり、そのために土地の人は怖れ慄い

俗叢話』からご紹介しましょう。

「昔箱根山に『アマンジャク』といふ怪物がいて、富士山取崩しを企て、或晩土をもつて相模灘まで来る途中、箱根山で夜があけた。そこでやむなく土を落とした。今の二子山はその時出来たのである」

これは先に紹介したダイダラボッチの伝説に似ているのですが、国土を造成できるといふ大きな人々は、例えば先に紹介した百合若大臣だったり、瀬戸内地方では武蔵坊弁慶だったり、関東では大多羅坊だったり、肥前島原では味噌五郎、岡山では三穂太郎などと、地域によつて名前が異なるのです。枇榔島を造つた乙媛も同じたぐいのもので、アマノジャクもその二に数えられたのでしょうか、日本一の富士山を削つてみようなどと、いたずら心は健在のようです。

(文・江口知秀)



箸墓古墳(奈良県桜井市 2009年撮影)

アマノジャクが住んでいたという箱根山のカルデラ湖「芦ノ湖」(神奈川県箱根町 2012年撮影)